



市民の心と 身体の健康に貢献する 都市の新拠点

大阪市 森ノ宮



森ノ宮駅から1分、大阪都市部の街中に、市民の心と身体の健康を増進させる目標をコンセプトに包摂した商業施設が誕生した。都市における幸福なまちづくりに新しい示唆を与えるユニークな試みとは。

縄文中期〜近世にわたる複合遺跡・森ノ宮遺跡により、縄文時代から人の営みがあったことが知られる大阪市森ノ宮地域。周辺に飛鳥・奈良時代の宮殿である難波宮、大阪城を擁し、歴史と文化に育まれ発展してきたまちだ。

一方、野球ファンに親しまれた日本生命球場の跡地が1997年の閉場以後活用されぬままとなっており、空洞化が見られている現状もある。

しかし、そんな長らく放置されていた球場跡地が、今春、装いも新たに生まれ変わった。再開発に着手したのは東急不動産(株)。関西エリアで展開されるモール型ショッピングセンター「キ

ューズモール」では4番目の施設にあたる。目指すのは、地域特性を生かし、まちに根差した「ここにしかない」商業施設という。

豊かな文化に育まれたまちの懐の深さ、阪神高速道路をはさんだ向かいに市民ランナー屈指のランニングスポットである大阪城公園が広がる立地——森ノ宮の地域特性から導き出されたのは、「豊かに生きる、ココロ・カラダ特区」というコンセプトだ。

名称は、球場跡地であることや、地域住民の生活拠点(ベース)となり、豊かで前向きな暮らしの基本(ベース)を支え、健やかなカラダづくりの基礎

(ベース)となつてほしいとの願いをもこめて「もりのみやキューズモールBASE」と付けられた。

スポーツクラブなど、「心と身体の健康」「より良い暮らし」をキーワードにした49のテナントが揃うなか、シンボルとなるのは屋上ランニングトラック「エアトラック」(榎竹中工務店と共同開発)。

ほかにも、豊かな「ココロ」を育てるコンセプトを反映した施設として、市民から寄贈された本を中心につくる市民参加型コミュニティ・ライブラリー「まちライブラリー」も置かれた。産声をあげたばかりの施設が都市コミ

ュニティの重要な拠点となることが期待されている。

成し遂げてきた人と 共につくる幸せな地域

今回、トップアスリートとしての経験を生かし、エアトラックの監修に携わったのが大阪ガス(株)所属、北京五輪銅メダリストの朝原宣治氏である。朝原氏と、プロジェクトチームのマネジャーである大阪ガス・石井智氏のおふたりに話を伺った。



MORINOMIYA Q'S MALL BASE

森ノ宮のまちの新拠点「もりのみやキューズモールBASE」。エアトラックが、ひとときわ目を引く。

朝原 先日、エアトラックの試走をしてみました。まず、トラックからの見晴らしがいいです。高さがあるので大阪城もよく見えますし、走っていると気持ちがいい。トラックの幅も競技用よりは狭いですが、十分な広さがあり、1周約300m、2〜3km軽く走るのにちょうどいいと思います。3レーンのうち、2レーンがランニング用、1レーンはウォーキング用としていますので、ショッピングに来られた方が気軽に利用できて、体調管理、気分転換の場になればと思います。向かいにランニングスポットとして親しまれる大阪城公園もありますし、ここでウォーミングアップして公園へ、といった活用もできます。

石井 今回、朝原だけでなくアスリートネットワーク(*)の選手たちも、

朝原 宣治

Asahara Nobuharu



あさはらのぶはる／大阪ガス(株)近畿圏部地域活力創造チーム、元陸上競技選手。1000mで日本人初の10秒0台。自己最高記録は日本歴代3位の100m10秒2。4回連続五輪出場、北京五輪の男子4×100mリレーで銅メダル。

朝原 この事業に関わっています。

朝原 私たちは日頃からスポーツを通じて、私たちの健康力向上とそれに伴うまちの活性化策を考えています。ショッピングモールというひとつの小さなまちを、私たちの経験を生かして元気にしていくことはできないか、選手たちで議論してきました。おかげで、例えばフットサルコートではメインコートとサブコートができて当初一面だったものが二面になり、小さな大会ができるようになったことでより多くのスポーツシーンが創出されるなど、私たちの意向がかなり入った形になりました。

石井 東急不動産は、キューズモールをたんなる商業施設ではなく、まちの共有財産にしたいという思いをもって展開されているんですね。彼らの活動は東急さんにも共感いただいて、採算がとれるのかと心配になるくらい意向を採り入れてくださった。スポーツが地域の資産となり、健康になることでまちの幸福度も向上する。東急さんと活動の場を得たアスリートネットワークのコラボレーションによって初めて実現できたものです。今ではみんな同志的になって、とてもいい感じのチームです。

スリートと身近に触れ合うことで高まるのは、健康度や、スポーツ技術だけではない。強い精神力をもって競技に向かう彼らの存在は、生きる力をも高めるものともなる。また、恩恵を受けるのはアスリート側も同じ。これまで培ってきたものを存分に発揮でき、さらに向上させていく原動力ともなるからだ。

石井 「地域」と「トップアスリート」の間に「健康」をはさむことで、子どもの育成から、中高齢者の健康力向上、多世代での交流など、少子高齢社会での魅力的な地域づくりにつながる幸せを呼びおこす。結果、彼らの役割や価値もあがる。そのしくみをどうつくるか。今回の取り組みはひとつの転機となると思っています。

朝原 やるからには我々アスリートの「本物の経験」を多くの人たちに感じてもらえて、共に元気になれるようなくしくみや活動を考えたい。選手たちは特殊な世界を歩んできている人間が多いです。爆発できる人が集まっていますから、5年間のうちに「こんな面白いことができるのか」ということをやりたい。地域の人が訪れて価値のあ

石井 智

Ishii Satoshi



石井 話を進めていくなかで、当初から予定していたスクール事業だけでなく、アスリートネットワークで「アスリートネットワークラボ」というショップもつくることになりました。ここでは、実際に身体のケアができるスペースのほか、スポーツ関連の情報収集や、大学・メーカーなどの共同研究、アスリートたちが選手時代に重宝していた、競技や健康にまつわるものの展示、といったことを考えています。

ほかにアスリートのセルフマネジメント能力を生かした身体のメンテナンスや食事のアドバイス、子どもたちのスクールでのコミュニケーションづくりなどがあげられます。スポーツがもっている機能を生かして、少しでも社会に何かできたかと考えています。

石井 テコンドーの元オリンピック選手である岡本依子さんの言葉ですが「トップアスリートは健康のプロ」ながら、それが直接伝えられるといいと思います。実は、今回のような事業を企画段階からアスリートが自ら考えてやるというのは、これまでなかったことです。正直なところ、広告代理店などイベントのプロに任せられた方がアイデア

るものを得られるいろいろな仕掛けを、ここを拠点につくっていくかと思えます。

石井 これまでも、選手の育成という講習の依頼はたくさんありました。ただ、相手がつくった場に呼ばれるだけ、1日だけのイベントで終わってしまっていたんですね。次へと続くことがなかった。それが、拠点ができることで「明日はこうしよう」と連続性が生まれる。そういった意味でも、もりのみやキューズモールBASEは、本当にスポーツが地域や人々の生活に根付いてひとつの文化、共有財産として皆に大事にされていくためのトライアルだと思っています。

森ノ宮から発信、「元気になれるまち」

石井氏は、朝原氏とアスリートネットワークの取り組みが、関西発信であることは、東京一極集中の流れにあって非常に珍しいことだと言う。また、朝原氏の言にあった「5年」とは、単純な区切りだけを意味するのではない。5年後——東京五輪を視野に入れながら、今後の展望を語る。



エアトラックで子どもたちに「走る楽しさ」を教える朝原氏(写真中央)。

石井 アイもたくさん出るでしょう。でも大事なのは、誰かが考えたものに乗っかるのではなく、自身で知恵を絞りながら考えることだと思っています。もちろん、途中でやめるのは許されないうという厳しさもあります。

朝原 最低5年は続けないと。それであかんかったら、その時はまた皆本気で考えるでしょう(笑)。

石井 こんな風に簡単に言っています。彼らは責任をもってやっています。普通の人間だと、こんな大きなことを任されたら、「失敗したら」とか不安でいっぱいになる。ところが、世界の大舞台で戦ってきた彼らは違う。彼らにはシンプルで自由な発想がある。一直線に「できること」を考えるのです。

共に高めあいながらつなげられる場

地域の市民がトップアスリート

近くに鎮座する鶴森宮(右)と、大阪城公園(左)。



石井 2019年から3年間は世界的なスポーツイベントが日本で開催され、多くの来訪者が訪れます。特に2020年東京オリンピック・パラリンピックが注目されていますが、東京だけでなく関西が日本を盛り上げるという意味では、関西が舞台になる2021年の関西ワールドマスタースゲームズを重視しています。関西の至るところに、もりのみやキューズモールBASEのようなスポーツで健康力を向上させるしくみを埋め込んでいく。そして2019年にワールドカップが開催されるラグビーや、オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲームズに参加し見に来る人が、もう一度訪れたい、住みたい、と思えるまちが続々と生まれていく。そんなビジョンを描きたいと思っています。そのためにも、この場がスポーツタウンとして、スポーツを通じてまちの元気を創出し、地域の人々の健康力をあげていけるよう朝原や私たちは努力する必要があります。ここが「元気になれるまち」になれば、暮らす人の幸福にもつながっていくと考えています。

(*)アスリートネットワーク、バレーボール全日本女子チーム元監督の柳本晶一氏と朝原宣治氏が呼びかけ人となり、柔道の野村忠宏氏、テコンドーの岡本依子氏、シンクロナイズドスイミングの奥野史子氏など、競技種目を越えたトップアスリート約30名で構成。スポーツを通し、自らの成長の過程で得た「本物の感動」を子どもたちに伝え、人として「生きる力」を育てていくための活動を行っている。

いしさとし／大阪ガス(株)近畿圏部地域活力創造チームマネジャー。大阪ガス野球部で捕手マネジャーを経験。同志社大学野球部監督、野球解説者を務めた後現職。2007年博士号(政策科学)取得。共著に「スポーツ政策論」など。